

ともに前進するための批評 菅原百合絵

今年刊行された川野里子『短歌って何？と訊いてみた』は、川野が聞き手を務め、十五人のさまざまな分野の専門家と短歌をめぐって対談を行うという「歌壇」の意欲的な連載を書籍化したものである。詩人の伊藤比呂美や小説家の三浦しをん、民俗学者の赤坂憲雄など各界の専門家たちが、川野とともに短歌を読み、それぞれの観点から互いの仕事について語り合っている。

・きけな神恋はすみれの紫にゆふべの春の讃嘆のこゑ

与謝野晶子『みだれ髪』

・誰がために摘めりともなし百合の花聖書にのせて縛りてやまむ

山川登美子『恋衣』

たとえば、美術史家の宮下規久朗はこの歌に登場する神が聖書の神とは異なるものであり、彼（女）らのキリスト教文化受容は「聖書に百合の花を載せて祈る行為とか、静物的な配置、それが一種の西洋文化です、この人にとっては。真剣に神との対話をすることは全くないでしょう」と述べている。浪漫派、ひいては近現代短歌全体までに及ぶ西洋文化受容、宗教、自我の問題に鋭く切り込んだコメントであり、西洋の宗教画に深い造詣をもつ宮下だからこそその含蓄がある発言である。

本書のなかでとりわけ興味深かったのは、川野が対談のなかで、対話のみならず批評の重要性を繰り返し強調している点である。

川野 最近、議論の土壌がなくなつたと短歌の世界でも聞きます。批評という土壌が前はあつて、そこで丁々発止やりあうことはあなたを個人攻撃したのではないですよという暗黙の約束がありますよね。だけど今SNSとかある意味で非常に個人どうしが密着するようなコミュニケーションツールに慣れてて（…）批評が成り立ちにくい。傷つくんじゃないかとお互いびくびくしています。その代わりによくあるのが共感しましたという批評です。共感というのは批評ではないと私は強く思っていて、共感で済むならそれは文学でさえないと思うんです。

納富 そのとおりで、批評や批判と非難や攻撃はぜんぜん違うことがわからなくなつてる。（…）

川野 （…）批評が磨かれることによってまた作品が磨かれていく、その往還が断たれて小さな共感の共同体が島宇宙のように点在しがちです。

対話の哲学者ソクラテスなど古代ギリシャ哲学を専門とする納富信留とのやり取りである。やや長く引いてしまつたが、ここで議論の土壌がなくなつた、という発言の意味は重い。共感ではなく、ともに前に進んでいくための批評を、という提言は、ともすれば内輪的な馴れ合いになりがちな結社においても重要だろう。ふと思ひ出されるのは、高良真実氏と奥田亡羊氏の一連のやり取りである。亡羊氏の本誌時評「新しい短歌地図へ」では「知の強要は許されるのか？知っていることが偉いのか？」という本質的な問いが投げかけられていた。歌歴や年齢関係なく、徹底して同じ目線に立つ真剣さは彼の知的強靱さを示すものだったと思う。もつとあの洒落な文章を読みたかった、と惜しまれてならない。